

除染土の処理を追う

写真は東京新聞 3月13日「こちら原発取材班」。東京新聞の本シリーズから最新の情報を得ることができる。原発関係の貴重な情報源だ。

リードから一東京電力福島第一原発から福島県各地に降り積もった膨大な放射性物質は、大量の除染土となって原発周辺の間蔵施設に戻り始めている。既に発生した除染土は、1400万立方メートル近くと途方もない量。帰還困難区域の除染が進めばさらに増える。中間貯蔵施設の建設地は、南北約8キロの広大なエリア。用地がまとまり次第、汚染された土の詰まった大型土のうを処理する施設群が造られていく。本格稼働した大熊町の現場の様子を報告する。(山川剛史)

昨年7月28日に福島大学で開催された「第4回 原発と人権」集会で、山川記者の原発事故報告を聴いた。福島現場をじっくり取材する山川記者らしく、除染土の処理をビジュアルに追っている。それにしても、原発事故後の除染から中間貯蔵施設へと、得体のしれない巨額の公共事業が続く。長年にわたり公共事業を調査研究してきた一人として、沖縄辺野古での米軍新基地建設とともに目が離せない。

2019年(平成31年)3月13日(水曜日) 11頁 4

こちら原発取材班

3・11後を生きる

福島第一原発事故 除染土の処理を追う

東京電力福島第一原発から福島県各地に降り積もった膨大な放射性物質は、大量の除染土となって原発周辺の間蔵施設に戻り始めている。既に発生した除染土は、1400万立方メートル近くと途方もない量。帰還困難区域の除染が進めばさらに増える。中間貯蔵施設の建設地は、南北約8キロの広大なエリア。用地がまとまり次第、汚染された土の詰まった大型土のうを処理する施設群が造られていく。本格稼働した大熊町の現場の様子を報告する。(山川剛史)

① 福島県各地の仮置き場(左、写真は本宮市)で保管されてきた大型土のうは、主に高速道路を使い(中)、中間貯蔵施設の受け入れ、分別施設(右)まで輸送される

② 土のうを切開 ③ 土のうをひっくり返し、除染土をコンベヤーへ ④ 空になった土のうは廃棄 ⑤ 石や根などを除去 ⑥ 土をさらさらにする材料を添加 ⑦ もう一度、石や根などを除去 ⑧ 屋外のベルトコンベヤー

この施設で扱う除染土は1班当たり8000ベクレル以下。受け入れ、分別施設内は毎時0.16マイクロシーベルト程度だった。

⑨ 施設で分別された除染土は、延長約500メートルのコンベヤーで一時的貯蔵用のテントに運ばれる

⑩ 土壌貯蔵施設では、タンクによる除染土の搬入、除染シートの敷工が同時に進められていた

メットソ (metso) のトラックが現場に到着している。

3号機 燃料取り出し 東京電力は7日、福島第一原発3号機用済み核燃料プールからの核燃料取り出し作業を4月に延期すると発表し、開始を予定していたが、延期の理由を明らかにしなかった。

4号機 7830トン 取り出し完了 建屋の解体は未定

3号機 8620トン 568体

2号機 7430トン 515体

ノロラ撮影。設群は一直線に配置

(2019年3月29日)